

春のきざし

土田龍太郎

なべてこの世にありとあるものいかでつかの間も遷ろはでやはあらむ。このことわりまことに諸行無常、是生滅法と如來の説きたまひしに異らず。四時交替のたちまちに人をおどろかすこと、げに歐陽永叔の造化無情不擇物、春色亦到深山内と詠めりしに似たり。春ははや夏の氣をもよほし、夏よりすでに秋はかよふと言へれば、冬過ぎて後やうやく春の來るにはあらず、春はかねて冬のさなかに發りて、人こそえ悟らざれ、顯れ出でむをりを待ちがてにただ潛みゐるとぞ知られぬる。

冬の三月の過ぐることにすでに二月にあまりぬれば、おのづから春のきざしの見えもやせむとおぼつかなきままに草の庵より眺めやるよもの景色、雪げの空いまだ晴れやらでいづく霞めりともおぼえず、野べはみな白妙に照りはえて、若草のいつ萌え出でむとも知られず、軒端の枝にかかれる雪よしや咲く白梅にまがふるとも谷の鶯のあざむかれまだきに來鳴かむことけはひだにさらになし。げにすさまじくわびしきは、人目も草もかれはてしわが住む冬の山里にしくものこそはなかるべけれ。

さはれただ埋火にのみむかひゐてつれづれとひねもすこもりをらむははたあいなし。柴の戸ぼそをおし開き、たれおとなふ道とてもなきわが宿のあたり、老いぬる身には杖の立てども知られねど、おのがつけし足跡のみをしるべにてたどるたどるも歩みゆく。昨日は肌へ凍らむばかり耐へがたかりし寒さ、今日はさしも身にしむとはおぼえず、夜の間に變る風の心地ぬるむとまではなけれどもなにとやらむのどやかなれば、つれなく見えし時の移ろひ、また色にこそは出でざめれ、そのしるしたえてなきにしもあらざるべし。

をりしも聞ゆるかそけき水の音、うちおどろかるるままに耳をそばだつるに、いとどだえがちなれば、近き谷川のせせらぎとは思はれず。すずろにゆかしくて四方をたづね見れば、むすぼれたる雪の下水の解けそめて、かたへにそば立てるさかしき切り岸のはざまをつたひくれども、石にせかれたるにやあらむ、流れもあへて行きなやみ、ただたえだえにのみ瀝り落つるにてなむありける。これぞこのおぼろけならぬ久方の春のきざしなると心嬉しきままにふと詠めけるは、

岩間もる水の音にぞ知られける

雪消えやらぬ深山みやまべの春

(平成二十九年二月二日受附)